

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 長谷川 賢

中国語の複文に関する研究はその大半が因果、仮定、逆接、譲歩などの論理関係に基づく分類作業に止まり、構文ごとの意味機能や構文相互の機能上の関連についての詳細な議論がいまなお乏しい。本論文は中国語の複文の精緻な体系的把握を目指し、類義関係にある複数の複文構造の意味機能および談話機能の連関と対立の関係を明らかにし、加えて、一つの構文が併せもつ複数の機能の意味連係の機構を明らかにしようとするものである。まず序章において研究の背景、動機および目的を述べ、第一章では日本語の「もし」に相当する接続詞“如果”および“要是”を用いる二つのタイプの複文を取り上げる。従来、両文は、従属節（以下「前節」）が〈仮定〉を表し、主節（以下「後節」）が〈結果〉を表すと記述されてきたが、本論文は、両文の前節が、〈仮定〉を表す機能のほかに、それからの拡張として、後節の表す事態が成立する〈条件〉を選択的に提示する機能をも有し、“要是”に至っては更なる拡張を経て談話上の〈話題〉提示の機能をも担うという事実を明らかにする。第二章では、“如果”と“要是”が複文の成立にとって文法上不可欠ではない構文環境にも屢々用いられる事実に着目し、両接続詞の重要な談話機能の一つを見出す。すなわち、両接続詞は、文脈上聞き手にとって想定の可能性が低いと予測される新たな〈条件〉を談話に導入する際に、聞き手の注意を喚起すべく「条件導入喚起」の機能を担うという事実を突き止める。第三章では、〈A か、さもなければ B〉という意味を共有する三種の複文を取り上げ、各々の典型的機能の対立は、選択対象となる A と B が〈一回的行為〉か、〈生起事態〉か、〈恒常的事態〉か、〈属性〉かという四種の事態パラメータと〈好ましくない事柄〉か否かという評価パラメータの組合せによって決定されるという新たな一般化を提示する。第四章では、「A 了 B (,) B 了 A」のかたちで二つの動詞を重ねて用い「A しては B し、B しては A する」という意味を表す述語連続の構造について、本構造の意味機能が、特定の動作の叙述ではなく、〈進展し難い状況〉の描写にあることを論証し、加えて、従来指摘のある「AABB」型の重畳形式が総括走査による描写を担うものであるのに対して、本構造は順次走査による描写を担うものであることを明らかにする。

以上、第三章の一般化にやや詰めの甘さが見られるものの、構文論の枠を越え、広く談話環境を視野に入れ、従来見落とされてきた種々の複文の意味機能と談話機能を新たに見出し、加えて、複数の複文構造の機能を有機的に捉え得た成果は、中国語の文法研究の進展に大きく貢献するものとして高く評価される。

よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。